

飛驒農林事務所の普及活動状況（飛驒版）

平成 31 年 3 月 31 日現在

今月の重点活動

■ もも 『飛驒おとめ』栽培マニュアルが完成

岐阜県で育成されたオリジナルもも品種「飛驒おとめ」の特性を活かした高品質栽培の実践と普及拡大を図るため、栽培方法をまとめた独自マニュアルを作成した。

現在、管内では約 2.8 ha の面積で「飛驒おとめ」が栽培されており、JAひだ果実出荷組合協議会総会において、現地における栽培上の課題の早期解決を図るため協議を進めている。

今後、農業普及課では、栽培講習会などの機会に本マニュアルを活用し、生産者の技術向上を図ることで、「飛驒おとめ」の生産と産地振興を支援していく。



【JAひだ果実出荷組合協議会総会】

多様な担い手づくり

■ 担い手

長期研修指導者の情報共有と受入に関する意識統一を目指して～情報交換会を開催～

飛驒地域農業再生協議会「人・農地プロジェクト」では、3月14日に平成30年度、31年度の長期研修指導者、高山市・飛驒市・下呂市、JA、農林事務所の計26名で研修指導者情報交換会を開催した。研修中及び就農に向けての支援制度の概要と変更点等について、農林事務所から説明し意見交換を行った。意見交換会では青年等就農計画の作成時には、今後5年間の経営計画を立てる大切な内容であるため、研修指導者も交えて検討して欲しい等、前向きな意見が出された。

その後、各市担当者から取組状況や支援制度が説明された。また、研修指導者から研修事例を紹介いただき、就農アドバイザーから「指導者の在り方」について講義をいただいた。

農業普及課では、当日までの企画や当日の運営支援を行った。



【活発な意見交換がなされた】

■ 飛驒地域トマト研修所 3期生3名が修了式を迎え就農へ、新たに4名の研修生を受入

2年間の研修期間を終えた3期生3名に対する修了式、新たに入所する5期生4名に対する入所式が関係機関参集のもと開催された。

終始和やかな雰囲気の中で、3期生からは研修期間の出来事や就農後の抱負などが、5期生からは農業を目指した契機や研修期間の決意などが語られ、それに対し関係機関から多くの激励の言葉がかけられた。

農業普及課では、修了生に対して就農後のサポートを徹底するとともに、新たな研修生の受け入れに対応すべく研修所体制の改善・強化を支援する。

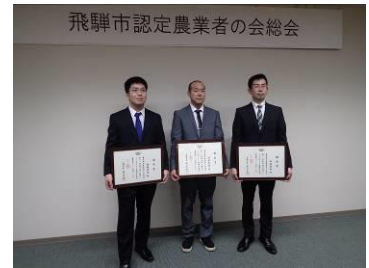


【研修生を囲んで節目を祝福】

■認定農業者 新規3名の認定農業者に認定証を授与

飛騨市は3月1日に飛騨市認定農業者の会総会と併せて認定書授与交付式を開催した。今回の交付式では、今年度中に新規に認定された3名と再認定された9名（2法人含む）に認定書が授与された。新規認定の3名はいずれも認定新規就農者からの移行であり、自己紹介では認定書を掲げて認定農業者としての今後の夢や希望を熱く語った。

農業普及課では、飛騨市と連携して新規に認定された認定農業者の経営改善計画の実現に向けて支援を継続するとともに、更に新たな認定農業者の掘り起しを行っていく。



【飛騨市認定農業者認定書授与交付式】

売れるブランドづくり

■水稲 堆肥の有効利用と良食味米生産を目指して

飛騨地域では家畜堆きゅう肥の利活用促進とさらなる食味向上を目指して、3月12日（火）にJAひだ農業管理センターで、特別栽培米等の生産者を対象に良食味米生産研修会が開催された。

当日は米・食味鑑定士、県試験研究機関から米の食味、堆肥の効率的な利用方法等について講演があり、活発な意見交換が行われた。また、農業普及課からは、GAPに関する基礎知識について説明した。

今後は堆肥の活用促進、さらなる良食味米生産等各種支援を行っていく。



【良食味米生産研修会風景】

■そば多収研究会 飛騨地区最多収の田中利博さんが多収の方法を伝授

3月1日に高山市荘川支所で、そば多収研究会を構成する荘川・清見地区の生産者および関係者10名が参加して、そば多収研究会が開催された。今年例年の栽培法の検討に加え、天候不順であった昨年でも95kg/10aの単収を上げた（農）荒城営農組合代表理事組合長の田中利博氏が講演を行った。講演では徹底した排水、田畑輪換による抑草・アレロパシー物質の除去などの栽培上のポイントが解説され、生産者は熱心に聞き入っていた。31年度は、この方法を取り入れた栽培方法が荘川で実施される。



【こうすれば穫れる！】

■果樹 飛騨の果実でGAP

3月5日（火）に高山市において、岐阜県GAP基準に基づく果樹生産者のほ場・施設の指導を行った。当日は、生産者から農場概要について聞き取った後、所有する施設の評価を行い、今後改善が必要な点を指導した。

管内果樹生産者では、既に他の若手生産者も農場改善に取り組んでおり、農業普及課では、今後もGAPを通じた農場の経営改善に向けた支援を継続して実施していく。



【農場評価の様子】

■夏秋トマト 夏秋トマト3Sシステム栽培研修会開催

試験場で開発されたトマト3Sシステム導入者が増加しているため、早期の技術確立と導入推進のため、3月18日(月)に導入者や予定者を対象に飛騨全域の研修会を開催した。

研修会では中山間農業研究所のほ場で3Sシステムの概要や特徴の説明を受け、高山市の現地実証ほ場では育苗の保温管理などを研修した。

現在、進んでいる育苗管理についても情報共有し、より安定した栽培方法を確立していくため、研究会組織での集まりを継続していく。



【研修会の様子】

■夏秋トマト 栽培研修会を開催

各地区で今期のトマト栽培に向けた研修会が開催されている。清見荘川蔬菜出荷組合トマト部会では、3月19日に生産者及び関係機関が集まり、栽培研修会が開催された。農業普及課からは、今年度のトマト栽培に向け、土づくりや高単収者の栽培傾向等について説明した。生産者はこれから始まるトマト栽培に向け、熱心に話を聞いていた。

農業普及課は関係機関と連携し、さらなる栽培技術向上に向けて生産者を支援していく。



【研修会の様子】

■ほうれんそう スマート農業（圃場管理システム）導入に向けた検討会

飛騨ほうれんそうにおけるスマート農業の実現を目指し、農業普及課では生産者代表、農機メーカー、JAと圃場管理システムの導入に向けた検討会を開催した。

まず農機メーカーが開発した圃場管理システムの概要について説明を受けた。当システムは土地利用型作物では既に普及しており、土地利用型同様に大規模経営化が進む飛騨ほうれんそう産地においても利用ができないか話し合った。

同じ圃場で年間4～5回作付するため記録が難しい、全圃場の作業進捗状況が俯瞰できる画面が欲しい、などの意見が出され、まずは生産者に試行的に利用してもらおう(一年間は無料で利用できる)方向で呼びかけることとした。

飛騨ほうれんそうでは、スマート農業の取組みはまだ始まっていないが、効率良く高品質なほうれんそうを安定生産するための手段として導入を推進していきたい。



【検討会の様子】

■ほうれんそう 新型調製機の稼働状況

農研機構が開発した新型調製機を導入した生産者において、今年の出荷が始まったため、機械の稼働状況を確認した。

今の収穫物の状態（折れやすい）も影響してか、下葉を掻き落とし過ぎてしまうという問題が発生していた。掻き落とすブラシの数を減らすことや、機械の回転数を落とすなどにより調整を図っていた。今後も季節や品種等に応じて機械の調製が必要になるものと思われる。また、この生産者は機械を3台所有しており、今後は手作業をなくし、調製にかかる作業員全員を機械に張り付ける配置にすることで、有効利用を目指している。

労力問題解決に向け、作業の機械化は最も現実的な手段であるといえる。農業普及課では現場での新型調製機利用に関する調査を継続していく。



【調製機稼働の様子】

■宿儺かぼちゃ 研究会が中日新聞賞「特別賞」を受賞

飛騨地域の特産物である宿儺かぼちゃの生産者で組織される「宿儺かぼちゃ研究会」が第78回中日農業賞の団体としては最高賞となる「特別賞」を受賞した。中日農業賞とは、中部9県の地域振興に貢献した農業者やその団体を表彰する中日新聞社主催の顕彰事業である。

名古屋市内で開催された贈呈式では研究会役員11名が出席し、中日新聞社長より研究会長に賞状が贈呈された。また、その後に行われた祝賀会では、研究会長及び農業普及課長より、かぼちゃの栽培により耕作放棄地を解消する「緑の番人」の役割を担っていること等、研究会の活動が紹介された。

農業普及課では、今後も安定生産、品質向上等に向けた宿儺かぼちゃ研究会の取り組みを支援する。



【中日新聞社長より賞状を贈呈される研究会長】